第621号平成9年2月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

樹形にみる森林の生き残り戦略

新田隆三

写真　偏形樹の根元は風揺れしにくい

■上を向いて歩こう

巨大な構造物としての樹木は、光競争に競り勝つために高く伸び、その高さに伴う自重や風雪圧の増大に負けないように、様々な進化をなしとげてきた。樹体のミクロな機構を理解した上で、森林、とくに山岳地帯の森林を歩いてみよう。きっと風雪に耐えて生育する樹木の姿が、〝視れども見えず〟だった樹木のダイナミックな動きが、森林の生き残り(サバイバル)を賭けた姿であることに気がつくだろう。

ここでは、針葉樹と広葉樹の樹形の違い、風雪に耐える仕組みの基本について述べる。

■弱いから鉛直な針葉樹

幹を見ると、針葉樹は鉛直至上主義で、一本気で素直でハードである。広葉樹は光の多い方向へ幹を分岐させ、曲線が多くソフトである。しかしカシの棍棒やヤチダモの野球バットはあっても、スギ棒は弱くて使えない。機械的な強度を比較すると、広葉樹材は概して針葉樹材の二、三割は強い。樹形からくるイメージとは反対に、広葉樹はハードウッド、針葉樹はソフトウッドと呼ばれる。広葉樹は針葉樹よりも進化した仕組みをもっており、光競争にも風雪に対しても有利である。

針葉樹の木部の基本組織は仮道管といわれる中空のパイプ細胞である。仮道管に、根から枝先へ水分と無機物を運ぶパイプの役割と、巨体を支える柱の役割とを兼ねさせている。しかし兼用組織の悲しさ、仮道管には太い幹を横や斜めに張り出させるだけの強度は与えられていない。細枝を光の多い方向に派生させるのが

1997年(平成9年)
2月号(No.621)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

樹形にみる森林の生き残り戦略…1
マナスル登頂40周年記念展覧会・主要出品目録……3
報告
図書委・懇談会　トリノ山岳博物館館長と……4
ジャック93会第5回登山集会…4
丹水会・第31回例会……5
支部だより……6
山形支部　北海道支部
海外の山……7
東西南北
「写真展ウエストンの見た明治・大正の日本」終わる……8
ゴーキョ谷の遭難碑建立……8
アルタイを歩く……9
梅里雪山一周巡礼路の旅……10
ヒマラヤ展望トレッキングで喜寿祝い……10
山の歌「街の子」と交野武一さんに想うこと……10
白神山地行……11
魅力と喜びの"ついたち"登山…12
ウエストンと明治23年1月以降13
図書紹介……14
住所変更……16
図書室受入報告・新入会員……17
会務報告・会員異動……18
INFORMATION・ルーム日誌……19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10〜20時
水・金曜日　13〜20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13〜20時

やっとである。

もしも主幹が移植、地すべり、風などにより少しでも傾くと、針葉樹には主幹を鉛直方向に修正し成長させるホルモンが分泌される。その結果、赤黒い細胞（圧縮アテ）を伴った新しい年輪成長が、傾いた幹の下向きになってしまった部分をとくに肥らせ、次第に外見上は鉛直に修正される。傾いたまま育つと主幹はいずれは裂けて枯死してしまう。林業で有用な針葉樹の鉛直な主幹は弱さのシンボルであり、サバイバルを賭けた姿でもある。

■広葉樹は吊り上げクレーン

広葉樹の木部は太いパイプ（道管）と強い繊維束とに分化した。軽量で十分な強度をもつ微小なセルロース繊維の束が木部にあり、樹体支持に専念する。この木部繊維は引っ張りに強く、鉄筋に擬せられ、オーバーハングも何のその、ものを吊り上げるのが得意である。クレーン（鶴首）のような吊り上げ機能をもつためには、傾いた幹の部分や太枝の背筋に相当する上側の年輪を、ホルモン（引張アテ）分泌により優先的に肥大させる。

図　針葉樹（左）と広葉樹（右）の傾幹部の偏心成長の違い

傾いた幹や張り出した大枝を腕に例えると、広葉樹は力瘤が腕の上側に盛り上がって重いものを吊り上げ、針葉樹は腕の下側の筋肉を太くして下から支え持つタイプである。したがって枝の断面を見ると、年輪の芯は中央にはなく、広葉樹は下方に偏り、針葉樹は上方に偏る（図参照）。ちなみに切り株の年輪断面が南側に幅広いというサバイバル法則は、現実にはない。偏心成長の機構は陽光とは無関係である。

マツ類（アカマツ、クロマツ）は針葉樹の中で最も強いグループに属し、広葉樹に負けじと太い枝や幹を横へ斜めへと張り出す。しかし、日当たりの悪くなった大枝は雪や風で折れる。樹高の大きいマツは、よく見ると折れ傷だらけである。樹体の上部が折れて欠けると林床に光が入り、若いマツが後継樹として育ちやすくなる。陽樹のマツはそうした若返り戦略を持ちながら、命懸けで横枝を発達させるのである。

■風揺れの相殺

強風下で実験したり風害跡を調べた結果、風上にせよ風下にせよ、大枝や幹を風と平行する方向に分岐させた樹体は、風による根元の動揺が小さいことが分かった。

強風には息がある。風上の大枝に当たった風の最強部分は、少し時間をおいて風下の大枝に当たる。風上の枝と風下の枝とは弾力が違い離れてもいるので、揺れの周期と方向とは一致しない。大枝と大枝の付け根にあたる幹では、ばらばらな動きをする枝相互の影響を受けて、どの方向へ揺れていいのか分からない。根元に近づくほど揺れが相殺されて揺れ幅は小さい。光を求めて枝葉が広がった暴れ木は、風圧を受ける面積が大きいから不利かというとそうでもない。綱渡りは長い竿をもってやれば足下が安定するという。暴れ木では受圧部分の時間差、距離差が効いて、各枝が個性的に揺れるので、相殺されて根元は揺れにくいという状況が生まれる。しかし逆に湿雪がくっついて重くなり、枝が揺れないときには、強風が当たると簡単に樹体は根元から傾き倒れてしまう。

山岳稜線に多いシラビソ、カラマツなどの偏形樹は、風上側に太い枝を欠き風下側に数少ない太い横枝をなびかせ、フラッグ（旗）トリーともいわれる（写真）。片足立ちの姿勢はいかにも不安定だ。しかし強風の中で比較実験をしてみると、風下側の複数の下枝がマイペースでゆったりと上下に揺れて、幹の揺れを減らしてしまっている。一方、下枝が少なく枝の短い林業向きのスリムな針葉樹は、もろに根元も風揺れして不安定だった。偏形樹は免揺（震）機構を自ら備えた耐風樹形だったのである。

（信州大学農学部教授）

東京グリーンホテル　都内に3店舗654室
各種ご宴会，ご会合にご利用下さい

水道橋店●〒101 東京都千代田区三崎町1-1-16　TEL.03-3295-4161
御茶ノ水店●〒101 東京都千代田区神田淡路町2-6　TEL.03-3255-4161
後楽園店●〒112 東京都文京区後楽1-1-3　TEL.03-3816-4161

マナスル登頂四十周年記念展覧会について

マナスル登頂四十周年記念行事の映画と講演会に併設して、毎日新聞社の後援を得て、標記展覧会が開催された。この記念展には、毎日新聞社提供によるパネル写真のほか、資料委員会で保管しているマナスル隊使用の装備、登頂記念の品々、図書室の蔵書中よりマナスル隊に関連する図書、地図などが出品され、資料委員会各位の努力もあって、充実した内容の記念展となった。会場の関係で二時間程度の展示時間しかなく、もっとゆっくりと見たかったとの声も聞かれたが、好評裡に終了することができた。

展示内容は、下表「出品目録」の通りであるが、記念品については、故今西壽雄氏より本会に寄贈されたものも多く、また写真の引き伸ばしについては、毎日新聞写真部の三浦拓也部長、永田勝茂編集委員、滑志田隆氏より、多大のご協力を得た。記して謝意を表します。

［出品協力者］毎日新聞社、秩父宮記念スポーツ博物館、大迫山岳博物館、村木潤次郎、依田孝喜、松田雄一、日下田実、小原晴子、薬師義美の各氏。

（松田雄一）

マナスル登頂40周年記念展覧会
主要出品目録

1　マナスル登山隊記録写真（依田孝喜報道隊員撮影）
- 1952年踏査隊写真……1枚
- 1953年第1次登山隊の写真……2枚
- 1954年第2次登山隊の写真……1枚
- 1956年第3次登山隊の写真……26枚
- マナスル東面　登山ルート図……1葉
- マナスル登山クロニクル（1952～1996年）池田常道編…1葉
- マナスル初登頂成功の新聞記事（全紙大パネル）……1枚

2　マナスル登山隊使用の主要登山装備
- 酸素補給器一式（ボンベ、エコノマイザー、レギュレーター、背負子、酸素マスク）川崎航空機㈱製
- 高所用特殊靴（七重構造）
- ピッケル（シェンクモデル、札幌門田製マナスル型）
- アイゼン（札幌門田製8本歯、マナスル型）
- 羽毛服（上・下）
- ナイロン・ザイル
- 安全ベルト（カラビナ付）
- ハーケン類（氷雪用、岩用）
- 羽毛入りオーバー手袋
- 高度計（旧型アネロイド、航空機用改造新型）（柳計器製作所）
- 無線通信機（登頂隊用発信器）
- メタクッカー（スイス製：輸入品2品目の中の1種）
- マナスル型変形ウインパー型天幕（吉田テント、ブロード製）
- ガルツェンが頂上に携行した日・ネ国旗付ピッケル（ホープ）
- ＢＣに掲揚した手製の日章旗（全隊員署名入り）

3　マナスル初登頂記念品
- 秩父宮妃殿下から賜った和歌5首の額
- マヘンドラ国王陛下より授与されたコロネーション・メダル
- マナスル山頂の石　2種
- マナスル山頂から1986年冬に山田昇氏が回収したピース缶
- マナスル登頂記念金メダル
- 朝日賞（1956年度受賞）
- 毎日スポーツ賞（同上）
- マナスル登頂記念切手（1956年11月3日発行）
- ネパール政府のマナスル登山許可書
- サマの村長から受領した4000ルピーの証文
- マナスル会記念色紙（4種）
- マナスル会記念全隊員署名入りの清水焼絵皿（清水卯一作）
- マナスル山頂の石入りの清水焼のぐい呑
- マナスル隊員携行のマスコット人形
- マナスル初登頂に対する外国からの祝電
- 毎日グラフ――マナスル登頂記念号

4　マナスル登山隊関係図書類
◎公式報告書
- マナスル　Vol.1（1952～53）　毎日新聞社発行
- マナスル　Vol.2（1954～54）　毎日新聞社発行
- マナスル写真集（1952～54）　毎日新聞社発行
- マナスル登頂記、槙有恒著　毎日新聞社発行

＊・日本山岳会「会報」No.151～200号合本
- 年報「山岳」45, 46/47, 48, 49, 50, 51, 53, 54年の各号

◎学術報告書
- Fauna & Flora of Nepal Himalaya(1955)日本学術振興会
- Land & Crops of Nepal Himalaya（1956）　同　上
- Peoples of Nepal Himalaya　（1957）　同　上

（注）上記3部作は第1回秩父宮記念学術賞を受賞した。
- 隊員がそれぞれの所属している学会誌等へ報告した論文のリストならびに一部現本の展示品

◎マナスルに関する隊員の手記等
- 三田幸夫：山なみはるかに、わが登高行（上・下）他
- 槙　有恒：マナスル～少年少女のために、わたしの山旅他
- 加藤喜一郎：山に憑かれた男
- 成瀬岩雄：山・よき仲間他

◎外国ジャーナルに掲載されたマナスル隊の記事掲載誌
- The Alpine Journal No.282（1951）
- Himalayan Journal Vol XX（1957）
- Mountain World 1954, 1955, 1958/59

◎ＪＡＣ隊初登頂以降のマナスル登頂報告書
- 日本マナスル西壁登攀隊：マナスル西壁登攀報告書（1971）
- R. メスナー：マナスルの嵐（マナスル南壁の記録）（1972）
- 同人ユングフラウ：マナスル――1974（女性隊登頂記）
- 日本・イラン合同隊：友情はマナスルを越えて（1976）

◎その他マナスル隊関連図書
- H.W.Tilman：Nepal Himalaya
- Showell Styls：The Moated Mountain
- Dr.Toni Hargen：Building Bridges to the Third World
- 大森弘一郎：空撮ヒマラヤ

◎マナスル隊使用の地図
- 印度測量部作成の50万分の1地形図「ネパール」（一式）

5　マナスル登頂40周年記念ネパール行事の資料
- 記念写真（記念展覧会、記念レセプション、サマへの記念トレッキング、ビレンドラ国王陛下謁見の写真）……5枚
- 登頂40周年記念切手カバー（COMMEMORATIVE COVER）他

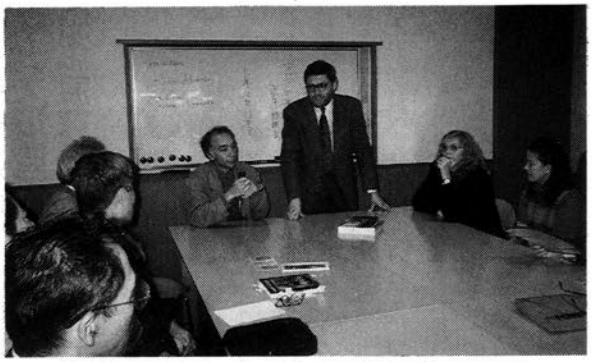
報告

REPORT 2月

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

図書委員会

懇談会
ウエストン写真展をめぐって
ートリノ山岳博物館館長とー



挨拶するアウディーズィオ氏、右は同夫人とミヤハラ氏

日本山岳会生みの親で、名誉会員でもあるウエストンが収集したという写真を基にした写真展（当会名誉会員F・マライーニ氏監修）については、すでに会報や「山岳・第九一年」、あるいは「岳人」誌などに杉本誠氏によって詳細・的確な紹介がなされている。今回の写真展を機に来日したイタリア国立トリノ山岳博物館館長アルド・アウディーズィオ(Aldo Audisio)氏に敬意を表し、九六年十月十一日、多忙な滞在日程の中の一刻、ご夫妻をルームにお招きして懇談会を行った。

中村副会長の歓迎の言葉の後、アウディーズィオ氏から興味深いお話があったが、すでに前記各誌で紹介され、重複することもあるので、以下には概略を報告する。

一、同館は世界の各種山岳資料の収集と保存を目的の一つとしているので、今回のウエストン関連の写真もその一環として入手した。

一、スイスの知人からこのコレクションの存在を知らされた。所有者はイギリスの骨董屋さん。二千五百枚の写真のうち二百五十枚が日本関係だった。その中からの選択はできず、一括という条件だったので全てを購入した。山の写真は、写真展図録収載のもの以外は数が少ない。もとは日本の文化を伝えることを主体としたコレクションだったのではないか。

一、同山岳博物館は国の直営ではなく、イタリア山岳会の組織の中にあり、同山岳会が国から財政援助を受けて、その一部が博物館の運営にまわり、国立を名のる許可が出ている。運営予算の大半はイタリア山岳会（会員総数三十万人）からくるが、ほかに州政府などの補助もある。

一、博物館の施設の三分の一が展覧会用で、年間四、五回の展覧会を開き、その都度、同一サイズのカタログを作っている。

懇談会はその後軽食をとりながらの雑談となったが、織内名誉会員はじめ四十名近い熱心な会員から幅広い質問が相次いで盛況だった。終わりに、同館所蔵品の中から、一九〇一年撮影というツェルマットからのマッターホルン登攀の映画（ビデオ変換）が上映された。わずか数分のものだが、映画が発明されて数年後の作品で、恐らく世界最初の山岳映画だろうという。

なお、同夕の通訳は、トリノ在住の画家で同館長の友人ミヤハラ・ミツオ氏夫妻（イタリア国籍）にご協力いただいた。厚く感謝の意を表します。

（大森久雄）

ジャック93会第五回登山集会

栗駒山

東北の名山、栗駒山へ行くと決定したのは、四月の第四回登山集会の時であった。早いもので、あっという間にその日がきてしまった。

一関駅に二十三名の会員（ゲストを含む）が集合。マイクロバスで一路登山口の須川温泉に向かう。

昼食後、登り始めた。土曜の午後とあって下山者が多く「こんにちわ」登山となる。山道は黄、赤と秋色の絨毯を敷き詰めている。まさに紅葉に埋め尽くされた栗駒山である。皆それぞれ感激し「素敵」「きれい」の連続である。期待していなかったが、ちょうど紅葉の盛りのようだ。

足を運ぶうちに、あたりにつんと鼻をつく硫黄の臭いがただよう。やはり活火山なのだ。澄んだコバルトブルーの水を湛えた昭和湖に着き、一服する。標高（一六二八メートル）

からは想像できないほど高山的で、しかもおだやかな山容をしている。少々急な登りになり、一頑張りで鞍部に出る。風は強いが稜線をゆるやかに登り、頂上に着いた。あれは焼石連峰だろうか、向こうは早池峰だろうか、遠く山々が連なり、広々とした山頂で憩いの一時を過ごす。

下山は東栗駒コースをとる。振り返り振り返り、素晴らしい景観を惜しみながらイワカガミ平を経て、今日の宿「いこいの村栗駒」に全員無事に着いた。

翌日は、早出組、バス組、現地出発組に分かれて行動する。我々主流である現地組十二名は「世界谷地原生花園」に行くことにした。いこいの村を九時出発、横手に表掛コースの登山口があり、そこより足を踏み入れる。この道が意外と素晴らしい。幻想的な雰囲気のブナの静かな樹林帯の中を歩く。時たま木々の間を涼風が通り過ぎ、小鳥のさえずりが心地好い。皆ルンルン気分で足を運び、途中の沢の冷水で喉を潤しながら山腹を横切り、岩魚沢、デロッコ沢を渡って、御沢で一休みする。

ここからが今回の山行の「サバイバル教室」の始まり。沢伝いに少々降りていき、沢から山道に入り、大地森コースと合流するのである。しかし表示の「日の丸」で尾根道に通じる道を探すが、道らしい道が見当たらない。沢を下って行くと、だんだん両岸は狭まってくるし、数十回も左右に川を飛び越したので、女性たちは大分足が疲れ出したようだ。それにしても、ルート工作の渡さんはエネルギッシュに動いてくれる。さすが元早大山岳部である。名前のごとく沢を簡単に「渡」ってしまう。

その後右岸の樹林帯が低くなったので、尾根まで藪こぎをしながら登ることにした。意外と藪はよく、斜面もなだらかで苦労しないで行くと、十三時四十五分、先頭の渡さんの「尾根道があったぞー!!」の声。皆大喜びで拍手し、「万歳」まで飛び出した。十四時四十五分、二時間遅れで駐車場に着いた。車中から黄金色の稲穂の波を見ながら、健康である喜びを噛み締めつつ、帰路についた。

（北山久雄）

平成八年度 海外登山基金について

海外登山基金委員会

平成八年度の海外登山基金助成につきましては、八年十二月二十日までに応募のあった二団体について、平成九年一月十六日、海外登山基金委員会にて審査を行い、二隊が承認されました。助成金総額は百万円です。

七十万円　㈳日本山岳会東海支部
　　K2学術登山隊一九九七

三十万円　神奈川県ヒマラヤンクラブ
　　日本スキルグルム登山隊一九九七

交付団体は報告書及び会計報告書が義務付けられています。平成九年度の基金助成については会報九月号に公表を予定しています。

丹水会第三十一回例会

大山山頂と南尾根

昨秋十一月三十日、丹水会の秋の例会が大山社務局入り口バス停前の「たけだ旅館」を会場に、五十三名が参加して開催された。

今回は高田真哉氏に終戦直後の丹沢の話をしていただいた。今はない原小屋の常連になって、近くの水場を使わせてもらえるようになったこと、土曜日に仕事を済ませて渋沢から入り、夜を徹して主稜を縦走したことなどを淡々とした口調で語られた。次に神奈川県体育協会の松田氏から、来夏建て替え予定の蛭ヶ岳山荘の概要について説明があり、丹水会への協力と寄付金の依頼があった。

続いて宴会に移り、地元の名物と銘酒で、タンスイ（堪酔）の名の通り、大いに飲み、大いに語り合った。とくに、当会の重鎮の一人で六月に亡くなった石川治郎氏を偲んで、川崎精雄氏が戦前初めて出会った時のエピソードなど、思い出をしみじみと語られたのが印象的であった。

翌十二月一日の山行は、下社から頂上を経て蓑毛へ出るポピュラーコース、下社から蓑毛越・高取山・善波峠・吾妻山を経て鶴巻温泉駅へ出る南尾根コース、この二つのコースをゆく健脚コースの三つに分かれた。旅館前で恒例の古谷・山本両幹事による全員の集合写真撮影後、九時に出発した。

私は六人の仲間とともに健脚コースを歩いたが、初冬の陽射しを浴びて気持ちのよい山行を楽しめた。下社までは名残の紅葉を愛で、二十丁目では真っ白な富士山に思わず歓声をあげた。頂上では南側に房総半島、真鶴半島、正面には相模湾の彼方に大島をはっきりと見ることができた。また北側に富士山、南アルプス、秩父連峰を背景にした丹沢山塊の眺望を満喫した。下りの長い南尾根もよく整備されて歩きやすかった。

途中、江戸時代には大山が女人禁制だったことを刻んだ石碑を眺めたり、昼食やお茶を楽しみながら、夕暮れまでにはかなりの時間を残して鶴巻温泉駅に到着。充実した一日の山行に満足し、半年後の再会を約して、家路をたどった。（森　武昭）

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

山形支部　晩秋の神室連峰・小又山

九六年十一月の支部山行は、絶好の秋晴れに恵まれた十一月十日、小又山登山を楽しんだ。

みちのくの隠れた名峰神室連峰は、栗駒国定公園の最南に位置し、奥羽山脈のほぼ中央の山形・秋田の県境上にある。主峰神室山（一三六五メートル）を基点に、南西に天狗森、小又山、火打岳、八森山、杢蔵山の峰峰を連ねる。

この山群の地形は、東西の斜面に非対象の特色がある。西側の緩斜面に対し、東側は雪蝕による切り立った急斜面の断崖で、稜線の二〇数キロに及ぶ縦走路は刀刃峰（カタナバミネ）といわれるやせ尾根からなり、さえぎるもののない山岳景観は岳人を魅了してやまない。

小又山は連峰のほぼ中央に位置し、標高一三六七メートルで連峰の最高峰。山容は主峰の神室山より端正で美しく、独立峰のごとく立派で貫禄のある山である。

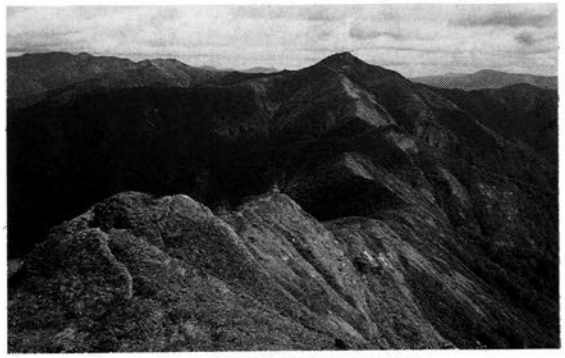
小又山登山は通常、縦走のコースをとり、一泊二日を要する。日帰り登山としては、最上町の西の又の登山道が一本あるが、急登、川の渡渉など、片道四時間余の健脚向きの難コースである。今回は地元岳人佐澤氏の協力も得て、西の又コースに挑戦した。

前日の大雨で不安がつのったのか、予定していた参加者は減ってしまったが、仙台から大橋克也前支部長の特別参加もあり、総勢十三名。午前七時にJR陸羽東線大堀駅に集結した。西の又登山口まで車で移動。増水で心配された西の又沢も、厚手のビニール袋を防水用に登山靴に履き、難なく渡渉する。登るにつれて天候は晴れ、雄大なブナ原生林から垣間見る神室の山々を仰ぎながらの快適登山。正午に予定通り小又山山頂に着く。

期待をしのぐ神室連峰の山並みに一同感激。南に火打岳大尺山、北に天狗森、神室山。遠くに栗駒連山虎毛山も晩秋の空に浮く。雪と雨に備えて準備したワカンや雨具は全く不要、行程も予定通り。

帰路は快適登山のお礼に山の清掃に精を出し、ゴミを収集しながらの余裕下山。またとない晩秋の楽しい登山であった。

（菅原富喜）



東西非対象地形をなす神室連峰

北海道支部　盛況だった支部晩餐会

恒例の支部晩餐会は十二月十四日、札幌市中央区植物園前のフジヤ・サンタスホテルに五十四名の参加者を集めて、十六時から開催された。

前半二時間は海外登山報告として、山口斌会員のロールワリン・ヒマールの山、中村喜吉会員のヌン峰D四一スキー滑降をスライドとビデオで映写し、最後に「日本山岳会この十年の歩み、人を讃え山を究める」を上映した。

晩餐会開会に先立ち、本年度物故者・泉亮、大久保五郎両会員の冥福を祈って黙禱を捧げた。

野田支部長の挨拶では今年度主要行事の経過説明と、十二月七日開催の支部長会議の報告がなされた。

乾杯の音頭は、一番遠い函館から出席の清水真会員（今年二十三歳で入会）が指名され、「父親のような人たちに囲まれて緊張しています」

東京・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡発着
ネパール・ヒマラヤ特別運行便
3/22発 ヒマラヤ・スーパーフライトとアンナプルナ展望9日間〈他全8コース〉
《スーパーフライトはヒマラヤを東から西へ飛びます》
特別企画 エベレスト→ロールワリン→ジュガール→ランタン→ガネッシュ→マナスル→アンナプルナ→ダウラギリ→ポカラ
運輸大臣登録旅行業490号／日本旅行業協会正会員／IATA公認代理店
アルパインツアーサービス株式会社
本社／〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06-444-3033　名古屋☎052(581)3211　福岡☎092(715)1557
仙台☎022(265)4611　広　島☎082(542)1660　札幌☎011(711)7106
●詳細ツアー・パンフレットをご請求ください。（㈱りんゆう観光）

に爆笑を受けつつ和やかに祝杯が挙げられた。

スピーチでは第十四代会長・佐々保雄名誉会員が「間もなく九十歳になります」と口火を切り、自ら一九三〇年七月に登った北千島の阿頼度島を回想し「まだ冬期には登った記録がないので何とか登ってみたい」とその意欲を示して、参加者の奮起をうながした。

朝比奈名誉会員、小須田評議員や遠く岩内町、新冠町、帯広市、旭川市からの出席者もあって、歓談はなかなか尽きなかった。

一九八八年に発行された『カムイミンタラ　特集・日本山岳会北海道支部の二十年』の貴重な資料とその記録写真を、当時りんゆう観光㈱から提供されていたものを、希望者に抽選で差し上げた。また本部から依頼されたJACマーク入りグッズ類の販売は好評であった。

支部報『ヌプリ』一〜二〇号総目録付き（一九七一〜一九九〇）一八四ページの復刻コピー版も頒布された。このコピー版を希望される方は支部事務局高澤光雄宛（〒〇〇三札幌市白石区北郷三条四丁目一−一二）に申し込まれれば、送料込み三千円、送金手数料不要で郵便振替用紙を同封の上お送りします。

（高澤光雄）

海外の山

デナリ冬期初登頂の真実

江本嘉伸

三十年前、一人の日本人が参加したマッキンリー厳冬期初登頂をめぐって長く語られなかった真実が明らかにされた。本のタイトルは『冬のデナリ』。著者は九六年十月、本の完成を目前に急逝した。

一九六四年六月、二十九歳の登山家が一万二千トンの木材運搬船「光洋丸」で兵庫県飾磨港からアメリカに渡った。植村直己が移民船「あるぜんちな丸」で横浜港を出発した一か月後である。「日本にない氷河を見たい」と飛び出した植村と違って、この登山家、西前四郎には具体的な目標があった。空路やって来る山岳会の仲間たちとアラスカ第二の高峰、セント・エライアス（五四八八メートル）に登ること、その後アラスカの大学で学ぶことだった。

エライアス峰に登頂した西前は翌六五年七月、関西登高会の仲間たちと今度は北米大陸最高峰マッキンリー（六一九四メートル）の南山稜ランペ・ルートの初登攀に成功した。「冬のデナリ」の思いつきは、その撤収時アメリカ人隊員だったアーサー・ディビッドソンと西前の会話の中で芽生えた。「デナリ」は、マッキンリーの本来の呼び名である。

一九六七年一月、五か国八人の登山家がマッキンリーをめざした。覚悟はしていたが、冬の自然の厳しさは予想をはるかに超えた。まず入山三日目にグランド・ジョラス北壁冬期第二登の実績を持つフランス人隊員がクレバスに落ちて死亡した。ショックは大きかったが、遺体を隊員の一人が故郷に送り届けることとし、登山は続行された。

本の中では「ジロー」の名で登場する西前は、〝参謀〟のニックネームの通り、この登山では、タクティックスを主に担当した。アーサー以下三人のアタック隊が三月一日、頂上をめざした時も第四キャンプまで三人の支援にまわった。

冬のマッキンリーは、日照時間が極端に少ない。三人は日没後三十分、暗闇の中を頂上に立った。氷点下四九度。寒さでバッテリーが凍りつき、キャンプとの交信はできなくなっていた。下山にかかると風が強まり、標高五五五〇メートルのデナリ・パスで嵐のため動けなくなった。八四年二月十二日の植村直己と似た状況だったと思われる。

隊長のグレッグや西前らキャンプの他の隊員たちは必死で三人の救出を試みるが、嵐の中では彼ら自身が危険にさらされた。三日たっても四日たっても、誰も下りてこない。ついに救出を諦め、下山する。

三人は雪洞で凍傷と戦いながら六晩を過ごし、三月八日、嵐のやむのを待って無人の第三キャンプまで下りたところで救援のヘリに救出された。西前は、第二キャンプで三人の無事と救出を知った。その時の喜び、そして仲間を残して下ってしまったことへの痛恨の思い……。

西前が三十年前のことを書こう、と決意したのは、最近隊長のグレッグ、登頂者のアーサーはじめ当時の仲間たちと再開し、率直にあの登山のことを語りあえたからだ。

冬のマッキンリー初登頂に日本人がからんでいたことを、不明にも筆者は知らなかったが、アラスカを愛した写真家、星野道夫は六七年冬のマッキンリーの記録に日本人が出てくるのに注目していたようだ。その星野の本を出した福音書店に、西前は原稿を持ち込み、その縁で二人は京都で会った。その後星野はカムチャッカで熊に襲われ、西前は自宅の屋根から落ちる事故で昨年十月十日亡くなった。

生きた証しをしっかり残して。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします）

イラスト　野田四郎

写真展「ウエストンの見た明治・大正の日本」終わる

杉本　誠

本会報六一五号で既報した写真展「ウエストンの見た明治・大正の日本」の豊田展が終わった（愛知県・豊田市立美術館、十月一日〜十三日）。短い会期の上、必ずしも交通至便とはいえない場所であったが、来場者は北海道から九州まで全国にわたり一万人を超えた。

豊田展のために用意した三百部限定のカタログがたちまち売り切れ、さらに保存用の百五十部を追加したものの、これも二日しかもたず、希望者に申し訳のない結果となった。出版元のイタリア国立トリノ山岳博物館にも残部はなく、一九九七年度巡回予定の東京（または横浜）展、松本展で入手していただきたいと思っている。

本展は、写真の原板を所蔵するトリノ山岳博物館の全面的な協力があってこその開催であったが、ウエストンの第一著作『日本アルプスの登山と探検』刊行百年目の一九九六年に間に合って何よりだったと思う。

それがきっかけとなって、ウエストンが明治天皇に献上した同書の特別装丁本を宮内庁より借用展示することができた。

監修者としてカタログの日本語解説書の編集に協力していただいた本会名誉会員フォスコ・マライーニ氏、写真及び展示資料の解説に全力を注いでくださったウエストン研究会の諸氏、さらにイタリアで本展が開催されてから一年という短期間で、日本展を可能にしてくださったウエストン展実行委員会の皆さんの努力なくしては、本展開催はあり得えなかったことを申し添えます。

ゴーキョ谷の遭難碑建立に参加して

中谷絹子

平成七年十一月十日、エベレスト山群のゴーキョ谷で起きた大雪崩で日本人十三名、ネパール人十二名が亡くなったことはまだ記憶に新しい。「この遭難碑の建立が平成八年十月末に予定されているが」と宮原巍氏からお誘いを受けた。

時あたかも日本山岳会のマナスル登頂四十周年に当たり、十月四日にカトマンズで記念レセプションが開かれ、私もこれに参加した。そして十月六日、記念トレッキングとしてマナスルBC近くのサマへ皆さんとヘリコプターで行った。ここで一行と別れ、十日に雪のラルキャ・ラを越え、十五日にカトマンズに戻り、宮原氏が日本から来られるのを待つことにした。

自然石に銅板をはめ込んだ遭難碑が完成

宮原氏は、遭難した二十五名の名前を刻んだ縦六〇センチ、横九〇センチの銅板を日本から持ってこられることになっていた。

十月二十七日、宮原氏とシャンボチェに飛び、ホテル・エベレストビューでシェルパたちと打ち合わせを行った。三日がかりでポルツェ・タンガ、マッチェルモを経て、ゴーキョ峰に通じるトレッキング道の標高四四八〇メートルのパシカに着いた。この遭難現場付近で適当な自然石を探し、二日間を費やして硬い石を彫って銅板をはめ込み、三十一日の午前中に碑は完成した。そこは抜けるような青空にそびえる白銀のチョー・オユー、タウチェ、タムセルクなどが望まれる素晴らしい場所である。

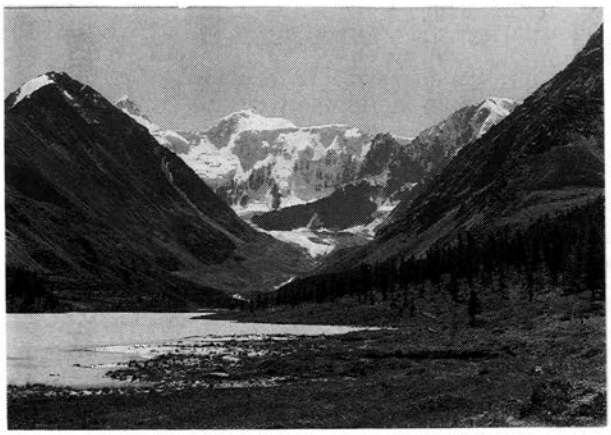
慰霊碑の建立を終えた人々の顔には、山の友人を失った悲しい思い出にひたりつつも、一つの役目を果たした、というさわやかな表情があった。私は亡き石井恵美子さんとは南

アルプスの塩見岳や光岳に登ったことがあり、山の縁がとりもつ悲しくもかけがえのない巡り合わせになったのである。

アルタイを歩く

中垣淑子

ロシア領アルタイは、シベリアの最高峰ベルーハ（四五〇六メートル）が聳え、魂の湖、七つの湖、ヤルルウ谷を抱き、シベリアの真珠と呼ばれるくらい美しいところである。昔からベルーハは聖山とされ、ベルーハ一帯は〝普通でないところ〟であり、シャンバラ（理想郷）があるといわれてきた。ベルーハは強いエネルギーを出しており、麓まで行った人は誰しも気分爽快になり、病気の人は治るという。



シベリアの最高峰ベルーハ（4506m）を望む

一九九六年七月から八月にかけて、私は約二十日間をベルーハの麓で過ごした。モスクワからバルナウルまではシベリア鉄道二日間の旅。バルナウルから二日間バスに乗ってトレッキングの出発点トゥングゥル着。ここから二日半歩いて標高二〇〇〇メートルのベースキャンプに着く。ペテルブルグから来たガイドのウラジーミルは四十五歳、バルナウルから合流した現地ガイドのアルチョムは二十四歳。二人で私の個人装備のほとんどを持ってくれた。

白く濁ったアッケムスコエ湖のそばは気象観測所やレスキュー隊の住居がある。ここにテントを張って、まずは魂の湖を訪れた。無論、道などあろうはずはなく、丸木橋を渡ったり浅瀬をボートで渡ったあとは、岩場をウラジーミルの勘で登って行く。湖があるはずのところになく、地図を見てさらに登る。約二四〇〇メートルのところに魂の湖はあった。折からの雨で湖の面は暗い。それでもここで昼食をとり、下りはじめると何だか嬉しい気分になる。ウラジーミルも同じらしく口笛を吹いたり、歌ったり、手を叩いたりしている。不思議な湖だ。

七つの湖へはアメリカ隊のガイド、ユーリの妻のオーリャが一緒に行くことになる。彼女はアメリカ隊と行った時は湖が二つしか見つからなかったという。登りながらオーリャにアルタイのエネルギーの話をすると、「とってもいい質問だわ。アルタイは普通ではないところ、聖域なのよ」という。第一の湖は浅くて太陽熱で暖かい。

一センチくらいの魚がいるのをウラジーミルが目敏く見つける。さらに登ると黒い色をした大きな第二の湖。次の第三の湖は小さくて青い色をしている。第四の湖はぐんと大きい。標高二七二〇メートル。ここで休憩、昼食となる。オーリャはショートパンツを脱ぐとタンクトップのまま水に入る。ウラジーミルもパンツだけになって潜っている。ロシア人は水さえあれば、どこでも、いつでも入るのだから面白い。第五、六、七の湖を回って苔のふわふわした斜面を下った。踏み跡のないのが嬉しい。オーリャは両手を広げて太陽のエネルギーを受けている。ウラジーミルはカラマツの葉に頬をつけて「ほら、柔らかいよ、秋には黄色くなって落ちるよ」という。

アッケム氷河へは曇りの日に行ったのでベルーハの壁はガスに隠されて見えなかった。二四六〇メートルのモレーンの上で昼食をとった。ナキウサギの声がしていた。

月の石は二六六〇メートルのなだらかな山頂の近くにあった。人の背よりも高い巨岩がまるでナイフでスパッと切ったように割れている。実は節理に水がしみ込んで凍結し、割れたものらしい。ここからヤルルウ谷へ下る。紫色の岩石の多いヤルルウ谷では隕石のようなものが発見されたとかで、宇宙人が来たのではないかともいわれている。途中に丸太小屋があり、さらに谷を下ると一面のエーデルワイスとウメバチソウのお花畑が続いた。まるで天国だ。

レスキュー隊の人たちとも親しくなり、お茶をご馳走になったり自宅へ招待されたりで、私はもうここを離れたくなかった。しかし帰らなければならないのだ。

帰りは三〇六〇メートルの峠を越えてクッチェルリンスコエ湖へ寄り道をして、出発点のトゥングゥルに戻った。途中に青銅器時代のものらしい動物の絵が岩に描かれていた。

こんなに素晴らしいところは現代のシャンバラとしてそっとしておきたい気になる。

梅里雪山一周巡礼路の旅

中村　保

一昨日、『梅里雪山一周巡礼路』踏破の旅から帰京しました。

この巡礼路を完全に通過したのは一九一一〜一三年のK・ウォード、一九九三年のニコラス・クリンチ、一九九五年のスペイン人（男）とフランス人（女）のペアしかなく、今回の小生のトレースが四回目になります。このほかの先蹤者（ベイリー、ニールなど）はこの地域に入っていますが、巡礼路の一部を通過しただけです。

巡礼路から見た未踏峰（6500m）

雲南省徳欽を出発して、徳欽に再び戻るまで、馬と徒歩で、チベット人の巡礼とともに歩いて十三日間を要しました。旅行というより、むしろ〝フィールド・ワーク〟といったほうがぴったりする体験で、巡礼路の地図上の確認、先人（ウォード、ベイリー等）の足跡との対比、現在のツァワロン地方（サルウィン川＝怒江流域のゴルジュの国）の状況を知ること等々、興味の尽きない毎日でした。

地図上にあって、今まで写真のなかった六千メートル峰の写真を撮ることもできました。いろいろな角度から新しい自分なりの発見をすることができました。

予定通り、梅里雪山巡礼路の一周を無事完遂できましたことは何よりの喜びとするところです。

＊

（一九九六年十月二十四日付、松田雄一会員宛の手紙より）

ヒマラヤ展望トレッキングで喜寿祝い

柴田初子

今年で七十年間、山を歩き続け、山こそ日常生活の活性と繋がり、マスメディアの社会に暮らして自然体は切り離せないものとなりました。

一九七三年、モンブラン登頂記念に山岳会に入会し、その中で勉強し、また交流も広がりました。個人では登りにくい数多くの山を、集会委員の計画、支部のお誘いで登ることができました。そして九六年十一月二十三日、それは私にとって歓びと悲しみと満足の日でありました。

ゴラバニ、ブーンヒル（ネパール）で喜寿を祝いました。同時に急逝した昆虫学者の春田俊郎（弟）が、晩年ネパールの蛾・蝶の研究に情熱を傾けた追悼でもありました。

午前四時、テントを出発してブーンヒルへ。暗黒の空から、ダウラギリ、ニルギリ、アンナプルナI・II峰、マチャプチャレが日の出の光彩に染まって八千メートルが競い立つ迫力は、自分の年齢を越えて満足感がありました。

還暦祝いは同じネパールのガルワール山群テシラプッア峠で、古希祝いはマレーシア・キナバル登頂でした。ひたすら山を愛し、海外、国内を問わず、辺境で生活する人々に心打たれながら、喜寿を迎えました。

高齢者登山は、批判の対象になっていますが、私にとっては生命ある限りの山なのです。

日本山岳会会員としては、八五年、創立八十周年記念の黄河源流トレッキング隊、九四年訪台親善登山隊に参加して、国際交流を経験することができました。

海外遠征、個人的な各種記録達成、指導者による学習、著書などから常に啓発され、励みとなっています。

私としては、近郊の山でさえ道もなかった頃からの長い歳月の山の移り変わりを思い、女性が男性と同じように、山へ向かう現状を喜んでいます。

山の歌「街の子」と交野武一さんに想うこと

早乙女緩次

「山」の六一八号に、宮下啓三氏が「街の子」について、相当に苦心を重ねながら調査されたことが記されてあった。結局のところ作曲者は判明しなかったようである。しかしこの紙面をお借りしてご苦労様でしたと申し述べたい。

以前私が交野さんと「街の子」を合唱した折のこと、忘れられないもう一曲があったことを思い出した。「世代が違うのに良くぞ覚えていてくれたね、ついちゃーこれはどうかね？」と言いながら数多く所有される蔵書中から、私の所有するのと同

じ出版社発行の『愉しき浮浪児』（アイヒェンドルフ作・関泰祐訳）を引っ張り出して来られ、薄い紙面をめくりながら、「こいつはムシデンのメロディーに併せながら歌うといいよ」と説明された。交野さんは、「愛（めぐ）しと思うそのひとを　遠き世界へ旅だたせ　やま　かわ　森　野にあらわるる　ふしぎを神は見するなり」を指差しながら歌ってくれたが、必ずしもこれは詩とメロディーが一致するものではなかったと記憶する。

想い起こせば、これとても昔上高地小梨平のテントの中で蛮声を張り上げて歌いまくる一つに数えられていたが、常に文句と曲の合致が面倒くさいとの理由で後回しにされる歌だった。

情報化の叫ばれる今日とは甚だしく異なっていても、「山の歌」が忠実に仲間内に伝播され続いてきたのは、山人の純粋さがそのようにさせたのか、それとも、青春を甦らせる魔力のようなものを持ち合わせていたのだろうか？

宿命だったのか、現在に至ってはこの歌を聞く機会に恵まれなくなってしまった。

いずれにしても、戦時中にウエストンの胸像を外すため上高地に入ったり、大門池（現白樺湖）畔の茅葺き屋根の家に籠って山羊を飼育したり、アメリカ暮らしの体験が身にしみて英語が飛び出したり、物資の補給には辺鄙な処なのにわざわざコーヒー豆を碾いたり、そばがきを常食にされたり、肥たごを担いだり、畑を耕したり、窓辺に好きな仙丈岳に向けて望遠鏡を据え付けたり、読書三昧に耽ったり、ストーブにわざわざ生木をくべて火吹き竹を使い燃焼を促して体を使いトレーニングのつもり、一つ事を成し遂げる度に口にする言葉は決まって「カイラスとパタゴニア」の遠征計画だった。奇想天外で昔を彷彿させる真骨頂のようなものが備わった、シッチャカメッチャカに面白く、博識でスケールの大きい人だった。因みに、私の歌い出しは敗戦直後だったし、アイヒェンドルフを求めたのは昭和二十七年、シュミットボンは昭和三十一年、交野さんに初めて会ったのは大分昔の事、信州長谷村浦の古い山荘を訪ねたのは昭和五十五年頃からだった。

白神山地行

川上　隆

十月二十八、二十九日に山形大学山岳部OBたちに同行して、白神山地を訪ねた。折から青森市で開催された「白神山地を考える登山者の集い」に出席していた本会自然保護委員会澤井政信委員長、伊藤敞委員と二十七日夜、青森市内のホテルで合流し、総勢八名となった。

二十八日、八時三十分ホテル発。青空のもと津軽の秀峰岩木山を右手に眺ながら、岩木川の支流暗門川を溯る。西目屋村を過ぎ、山懐に入ると、トチ、カツラなどの大木が黄金色のトンネルを作り、その下にはハウチワカエデやヤマモミジなどが秋の陽をあびて紅葉の真っ盛りである。

やがて暗門の滝入り口の車止めに着く。色とりどりの落ち葉を川底に、あるいは水面に浮かべる暗門川を右に左に渡り、一時間三十分でこのコースの一番奥にある第一の滝に着く。滝は手前から第三、第二、第一と三つあり、いずれも落差は四〇メートル前後である。滝を取り巻く側壁は紅葉に包まれ、豊富な流水とあいまって神秘的であった。この水量は、全山を覆うブナ林の保水力を証明するものであろう。

白神山地は現在の土木技術をもってすれば、いかなる観光開発も可能であろう。しかしいったん自然の生態系を根本の部分で破壊すると、百年千年では回復不可能という。皮相的な大衆化や利益追求だけの開発では、すでに破壊が激しいいくつかの山域のように、白神の森林帯や動植物群は早いスピードで潰滅するのではないか。あれこれ考えながら十四時、暗門の滝ルートに別れを告げる。

津軽峠を越え赤石大橋を渡ると、間もなく「林木遺伝資源保存林」に到着する。ここのブナ林は、樹高三〇メートル以上と思われる大木群が、スラリと真っ直ぐに伸びている。まさに原生林のシンボル、落葉広葉樹の王者の風格である。伊藤委員の説明するブナ林の遺伝子プール現地保全の重要性が理解できたように思う。大きなブナともなると、四〇万枚もの葉を繁らせ、豊作年には数万個の実をつけるという。林床の山菜やキノコは木の実ともども、多種多様の動物や鳥、昆虫たちの餌となり、落葉や落果は地中の微生物を育み、肥沃な土壌を作る。人間もその恩恵を受けて生存している動物なのである。

十五時四十分、天狗峠で珍しい看板に出会う。入山者があらかじめ営林署に頼んでおくと、この峠で落ち合い、山の案内や説明をしてくれるというものだ。世界自然遺産として登録された手つかずの自然環境を積極的に守り育てるためには、このような教育的方法も必要であろう。

白神山地は世界最大規模といわれるブナ林地帯であり、その森林生態系を保護するため、遺産地域を核心

地域（約一万ヘクタール）と緩衝地域（約七千ヘクタール）に分け、前者については入山規制を行っている。緩衝地域は森林の文化、教育的利用、森林レクリエーションの場として、利用をはかるものとされている。

入山規制ともなれば、当然いろいろな意見が出されている。すでに他地域の一部山域で、林道や観光施設の利用による山地崩壊、入山者による森林や草原の動植物、谷川の魚類などが破壊や消滅の危険にさらされているという。こうした現実を考えると、世界自然遺産である手つかずのブナ林地帯を守るためには、白神山地の一部山域の立ち入り規制は止むなしの感があるが、いかがなものであろう。これからは、自然を構成する一員として、いかにうまく共生していくかを真剣に考える必要があろう。

最後の峠一ツ森を越すと、あとは日本海に向かっての下りである。岩崎村に到着する頃には夕闇も迫り、いささか疲れを感じた。このあたりは、海蝕海岸に夕陽が沈む景観が壮観だというがすでに街道筋は暗い灯が点在するだけの暗闇であった。

十八時、秋田県八森町の海辺の宿に入る。ここで日本山岳会秋田支部長・岡田光行さん他二人の支部会員の出迎えを受け、歓待される。魚料理と地酒に舌鼓を打ち、疲れがいっぺんに吹き飛んでしまう。今日一日は雲一つない澄みきった青空の下で、全山黄金色に輝く山々を眺める素敵な旅であった。山よし、友よし、酒よしで、深い眠りに就いた。

二十九日、八時出発。岡田支部長の先導で二ツ森を目指す。林道に入る頃から雨となり、登るにつれ激しくなる。時折視界が展けると、谷間にはスギの植林帯と、ところどころにトチやイタヤカエデの大木が見られた。尾根筋には、ひねこびたダケカンバとカラマツが点在している。車止めに着く頃には、ひとしきり雨は激しくなり、二ツ森行を断念。ここで白神山地行も終幕を迎えた。十時二十分山麓の海岸道路で支部の人たちに見送られながら、大館経由で帰路についた。

さて、生物の進化は、数万年の年月をかけて現れる環境への適応だという。人間が、近視眼的に数十年の単位で物事を考え、自己本位な経済効率優先の志向をこれからも続けてゆくとすれば、日本の自然は次の世紀中頃には破滅的になるのではないか。白神山地の豊かな森林帯を堪能するにつけ、C・W・ニコルさんが言う「豊かな自然を失った国に将来はない」という言葉の重みを感じさせられた山旅であった。

＊

この小文は今回の「白神山地行」のリーダー、山形大学山岳部OB金山俊昭さんからいただいたメッセージを参考にして草稿した。

魅力と喜びの"ついたち"登山

松岡　繁

初冬の昨年十二月一日、織内名誉会員と照内、松岡の三名で、念願だった大蔵高丸に登った。晴天に恵まれ意義のあるついたち山行であった。

八時五十五分に相模湖駅を出発、国道二〇号を走り、十時に甲斐大和のレストハウスを過ぎ、景徳院駐車場で山友達と合流した。苔と落ち葉の石段を登り、景徳院を見学、武田家の在りし日を偲んで合掌する。

焼山沢林道を安全運転で走る。舗装は砂利に変わり、白樺林と落葉松林が美しく印象的だった。約四十分で湯の沢峠に到着。車をデポして山道を登る。霜柱と落葉の絨毯の心地好い山道を慎重に高度を稼ぐ。やや急坂も三か所あった。正午過ぎに大蔵高丸頂上に着いた。北西の季節風が強く吹いて寒いが展望はよく、富士山、南アルプス、奥秩父から大菩薩の景観に感激した。セーター、ヤッケを着て十三時十五分に山頂を出発、五十分で村営避難小屋に着いた。

気温はマイナス五度くらいで、耳や指先が寒さで痛い。ガスコンロで湯豆腐、おでんの馳走を味わう。握り飯も稲荷ずしも格別にうまい。静寂な山域と、明るいカヤトの原と、白樺、落葉松林は、ロマンと大自然を満喫できる。当日は私たちを含めて十数人の登山者であった。近くに聳える白岩の丸、黒岳山、大菩薩峠に別れを告げて十五時五十五分に湯の沢峠駐車場を出発した。夜空に星が輝く頃、無事に帰宅した。

今年の一月一日は、近くの低山に元日山行をした。自宅から底沢川沿いの林道を駆け足気味に急ぐ。小仏峠登山道にとりつき、通い馴れた山道を一汗かいて、十五時に昔関所のあった峠に着く。茶店が二軒ある。約二十五分で景信山に駆け登る。武蔵野平野から副都心まで見えた。白銀に輝く富士山、丹沢山塊、道志、奥秩父、奥多摩の山々が眺められ、大パノラマに感動した。

初心者向きの大衆コースで、指導標、案内板、山道も整備されていて、安心して登山できる。旧甲州街道ゆえ趣があり、懐かしい。四～五十年前は林業の仕事で城山や小仏峠、景信山に数百回も登ったことがある。山道には山吹きの花、猫柳、シュンラン、タチツボスミレなどの花が咲

き、野鳥や野生動物も多く生息して、自然環境は活力があった。植物、動物の生態系が健全に保たれ、豊富で美しかった。

郷愁と回想に耽りながら、夕暮れ迫る十七時過ぎに帰宅した。今年も情熱を傾けて登山しようとの希望を抱いての単独行であった。

ウエストンと明治二十三年一月以降

田畑真一

島田巽先人をはじめ川村宏、三井嘉雄、安江安宣の諸氏は、明治二十三年一月下旬のウエストンの動静について「一月下旬に船で横浜に着いている」（「W・ウエストン年譜」『山岳』第八十二年）と紹介する。これは一九八〇年二月一日付英字紙『ジャパン・ウイークリー・メイル』に基づく調査である。

島田先人らはさらに関係資料により「前年に引き続き、目の治療に通ったと推測される。この頃に、眼病が悪化したためか、あるいはその治療のために十分な宣教活動が出来なかったのであろう。彼は宣教師の職を辞任した」と紹介。ここでも問題にすべきは宣教師を辞任したことである。そしてこの点については「病気のために宣教師を辞任すれば、帰国して治療を受けるのが普通で、英国に帰った方が、良い医者も多い筈だ。宣教師としての給与もなくなり、本国からの仕送りがない限り、教会の献金だけの不安定な生活を強いられる。にもかかわらず、ウエストンは帰国しなかった。それが何故かを解明し得る資料は、今のところ見出せない」と続ける。

宣教師を辞任したことによる不安定な生活と横浜港への到着、実はこれらを結びつけると思われる有力な資料の発見があった。これは前記した一月下旬以降、不明だったウエストンの動静を明らかにした。

事の発端は昭和六十一年八月、隅田正三氏（島根県金城町）は、チベット探検家だった能海寛の英文日記『Wisdom and Mercy』（知恵と慈悲）などをみつけた。当時「チベット探検の先駆者能海寛生誕百二十年特別展「（昭和六十三年八月一日付「山陰中央新報」）との報道もあった。

その後、この英文日記を調査した岡崎秀紀氏（松江市）は、明治二十三年二月、能海が学んでいた慶応義塾にウエストンが教師として現れ、能海らに英語を教えていたという事実をつきとめた。詳しくは岡崎氏の論考「能海寛と日本アルプスの父W・ウエストンとの出合い－一八九〇年（明治二十三年）の慶応義塾を舞台にして」（『石峰三』）、「能海寛をめぐる人々－日本アルプスの父W・ウエストンと日本文化の紹介者・文豪小泉八雲」（『石峰二』）にゆずりたいが、資料紹介としてあげられた能海の日記も目の当たりにでき、興味深いものがある。

私は隅田、岡崎両氏の努力に対し、深い敬意を表する。ただ「能海寛と日本アルプスの父・ウエストンの出合い」（平成八年六月二十二日付「山陰中央新報」）との報道もあったものの、いずれも島根県下など一地域に関わるものだった。私はこれを関係者・関係機関の了承を得て、広く本会会員の皆様に紹介させていただくものである。

こころみに能海の別資料には「物理クライブ会話（今日は Weston 伝英人にて種々話ありき）」（二月二十三日付『春秋ノ記』）か、「物理クライブ音読（ウエストン君）」（同二十六日付）などの記事がある。また、「○物理クライブ音読（ウエストン新学をもちて来り追々にも日本にも英字新聞は盡になることなしは読みなるべしとて良文なりと英国ダービー県の新聞をもち来り読ませしやふのことを語々はなす）」（同二十八日付）などともある。

英文日記にもウエストンに関する描写が散見し、同様に英語を学ぼうとするなら、英字新聞を読むのがよいと言って、故郷ダービーの新聞を教室へ持ってきたとか、日本では英字新聞はまれだが、次第に普及していくだろうとか説いている（拙訳、要旨）。また、ドイツ語、フランス語、日本語の語順による比較・対象の説明などもしている（同）。これら英文には文法やスペルなどに誤りが多く、何を言おうとしているのか分かりかねる内容もある。しかし、英語が普及前の時代にあって、英語を学ぶ環境にも恵まれず、苦心して綴った能海の努力をこそ評価すべきであり、その誤りは責められるべきではないと思う。そして宣教師を辞任したものの、能海の記事からは、新しい職務に意欲を燃やすウエストンの姿もよみがえってくる。

［追記］本稿をまとめるにあたり、アナベリア・亀山、亀山哲郎の両氏からは、英文解釈上の示唆を得た。記して謝意を表します。

次代に残そう美しい山と渓

図書紹介

イラスト　野田四郎

近藤泰年・著
『傷だらけの神々の山　立山・白山の自然は今』

著者は立山・白山の山々を自らの足で歩き、「山から、環境問題を考えるきっかけになれば、この本は幸せだ」と結んでいる。

太古より、ブナ林が人間や動植物に与えていた恩恵、これを忘れてスギ林などにしたことによる自然形態の人工的弊害。人間の利害によって森林に手を出し過ぎていることで、森林行政の在り方などを批判、また観光のための林道建設など、開発による自然破壊を厳しく追及している。

立山・白山の自然を守るという立場から、行政・ゼネコン・観光客を敵視しているようにも読める一面がある。これは、著者の見方とはいえ、社会全体として合意が得られるかどうかは疑問が残る。内容から見ても、より受け入れやすい森林の在り方など具体的提案が欲しいところである。

しかし、問題点の理解など、自然保護の入門書として一読の価値はある。

（林　栄二）

一九九六年八月　山と溪谷社発行
二六一ページ　千六百円

日本山岳会信濃支部・編
『パトニーヴェイルからの風――山脈に語る――』

平成八年、ウエストン祭は五十周年を迎えた。本書はそれを記念して毎年、ウエストン碑の前の広場で行われている講演者の話をまとめたものである。

ウエストンのレリーフが、上高地の梓川右岸の岩に取り付けられたのは昭和十二年であるが、戦時中は当時の気運を考慮して取り外されていた。戦後再び旧の場所に戻そうということになり、昭和二十二年六月、戦火による破損を修復して同じ場所にレリーフははめ込まれ、その時関係者によってウエストン記念碑復旧式が開かれた。これが現在のウエストン祭の基となるのである。その後「ウエストン祭」「山祭り」などと呼び名は変わったが毎年開催され、第七回（昭和二十七年）からは信濃支部主催となり、現在行われているような形に整っていった。

本書は講話の内容によって、「ウエストン」に関すること、「登山の歴史」「海外登山」「自然保護」など七つの項目に分けてまとめられているが、講師がそれぞれの分野で得意とするテーマで話したものをそのまま文章にしているので、当日参加できなかった人も、この本を読むことによって、名前だけは知っている、という多くの先輩たちの謦咳に文字通り接することができる。講話の合間には、尾崎喜八がその朝詠んだよろこびの詩が挿入されて、一段と彩りを添えている。

書名に使われた「パトニーヴェイル」とは、ロンドン南西のウエストンの墓地のある地名とのこと。最後に収録された講演者二十五名のうち、故人となられた方々の名前をあげておこう。尾崎喜八、横内斉、槇有恒、山崎安治、今西壽雄、日高信六郎、渡辺公平。

（岩瀬晧祐）

一九九六年九月刊　田中弘美発行
二七三ページ　千八百円（別途・送料四百円）
＊問合せ・日本山岳会信濃支部
〒三九〇・松本市新橋三―二一
郵便振替・〇〇五四―一―二五四九三

五人の探検家・登山家の伝記

①David Gilmour［CURZON］John Murray,London,1994
②Annabel Walker［AUREL STEIN Pioneer of the Silk Road］John Murray,London,1995
③Patrick French［YOUNGHUSBAND The Last Great Imperial Adventurer］Harper Collins, London,1994
④Alan Hankinson［GEOFFREY WINTHROP YOUNG－Poet,educator,mountaineer］Hodder & Stoughton,London,1995
⑤Tim Madge［The Last HeroBILL TILMAN：A biography of the explorer］Hodder & Stoughton, London,1995

図書管理委員会の目配りのお陰で上記五人の探検家・登山家の最新の伝記がルームの図書室に入りました。カーゾン、スタイン、ヤングハズバンド、ヤング、ティルマンの業績についてはここで説明するまでもないでしょう。いずれもどっしりと持ち重りのする大冊ですが、大変ていねいで充実した索引がついているので、忙しい方は関心のあるテーマにそって拾い読みするのも一法でしょう。貴重な写真もきれいな印刷で豊富に挿入されています。ここで各書の内

容について述べる余裕はありませんが、とりあえず新着の紹介をしておきます。それにしても、大英帝国の光輝と残照の各エポックを象徴する人々の伝記が、今立て続けに刊行されるという、現在のイギリスの風潮に興味を覚えます。　（平井吉夫）

明治大学山岳部炉辺会・編

『炉辺　第九号』

一九八〇年に第八号が刊行されてから十七年ぶり、平野編集長のもと、待望の九号が発刊された。構成は第八号を踏襲しているものの、内容の充実が目につく。

巻頭言に続き「ふみあとⅢ」と題して、大塚博美氏がこの十五年間を総括。山登りが多様化している現在、将来の見通しをたてにくい時期に来ている、と大変示唆に富む発言をされている。

第一部は「エベレスト東西南北」と題した、エベレストを構成する四つのリッジ（東南稜、西稜、北稜、北東稜）からの炉辺会員による挑戦の足跡である。このうち東南稜と北稜からは山頂までトレースしているが、西稜は頂上まであと九八メートルが残され、カンシュンリッジ（北東支稜）も途中で断念している。このような栄光と挫折を味わったエベレストにスポットを当てた、世界最高峰での光と陰の特集である。

第二部は「ＭＡＣと植村直己」で、植村さんと関わりをもった会員とのインタビューを基に、大塚氏により植村直己像が描かれている。

第三部は「ＭＡＣのあゆみ」で、一九七九～九三年の間の現役部員の動向がまとめられ、章末に詳細な山行記録、部日誌、部長対談、炉辺会の記録が収録されている。

第四部は「海外紀行」で、二十四人の執筆者による多彩な海外での登山活動報告である。この間、西稜、カンシュンリッジ以外は、部を上げての登山隊は派遣してはいないが、ＪＡＣはじめ多くの隊に参加し、一九八〇年代には八千メートル峰七座に十五名が登頂している。

巻末は二十一名の追悼文「我らが山寮」で、富士山大文司屋の日誌が紹介されている。

現役部員の方も、卒業生「０」の時代もあったが、現在は二桁代と海外合宿を行えるまでになり、今やＯＢ、学生とも〝上げ潮〟ムードにある。明年秋には久しぶりにオール明治の隊でマナスル登頂を目指すとのこと、成功を祈る。　（松田雄一）

一九九六年十一月　明治大学山岳部・炉辺会発行　Ａ５判　五六七ページ　写真二一葉

＊購入ご希望の方はハガキで（住所、氏名、電話番号、冊数を記入）東京都文京区春日二－二五－三　天野真一宛　頒価四千円（送料共）

Jan Kielkowski・著

『CHO OYU HIMAL & KYAJO RI HIMAL』

概要・ガイド・記録

本書はポーランドで出版された英訳本「チョー・オユー山群」のガイドブックである。Ａ５判とコンパクトにまとめているが、内容は立派で、ルートと記録にうめられた研究書でもあり、訪れる人には心強い伴侶となろう。

チョー・オユー（八二〇一メートル）は世界六番目の高峰、山群の中心を占め東にギャチュン・カンをはじめ、七千メートル峰を東西に五峰、北に二峰連ねている。エベレストの西に隣接するチベットとネパールの国境山稜を形成しており、西は昔からの隊商ルートのクンブ・ラ、東はヌプ・ラ、南は支稜線キャジョリ・ヒマールがナムチェバザールに至っている。この広大な山群を対象に一八八五～一九九五年までの各国探検、登山隊の記録を収録、ルート説明とルート図、スケッチ、地図を掲載した大変な労作である。記録によればチョー・オユーは一六九回登頂され、その年月日と氏名が記されている。巻末には文献表と索引が付いている。なお、この山群には多くの未踏峰も残されており、地図上に表記されている。　（三沢一三）

一九九五年　ポーランドEXPLO社発行　一五二ページ

Robert Strauss・著

『Adventure Trekking』

A Handbook for Independent Travelers

ネパール、アフリカ、南米をはじめ世界中を歩き、多くのガイドブックを出している著者が、旅行社のト

味の技、心でつくる

創作料理　むさし坊

むさし坊　日比谷店
（東宝ツインタワービル９Ｆ）
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905

むさし坊　麹町店
（有楽町線麹町駅際）
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313

むさし坊　神田西口店
（神田西口通り商店街）
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015

友膳ゆうぜん
（半蔵門線半蔵門駅３分）
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊　番町店（日本ＴＶ通り五番町交差点角）
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

レッキングツアーではなく、一人で世界を歩こうと計画している人に贈る、豊富な経験に基づいたトレッキングガイドである。

各種装備、歩行技術、サバイバル技術はもちろん、自然界にダメージを与えず生活する方法、地域文化に対する配慮、病虫害に対する健康管理など、冒険旅行に出かける人が身につけてほしい事柄が網羅されている。一方、コースガイドとしては、ニューギニアの数十キロのコースや日本の利尻岳など、世界中の魅力的なコースの存在が紹介されているが、具体的な計画は巻末の参考資料に委ねている。

最新刊に相応しく、GPSに対する記述や、巻末にはインターネット上の各種情報源のホームページアドレスが掲載されている。（**狩野芳郎**）

一九九六年 The Mountaineers Books 発行　二五四ページ

雁部貞夫・著

『辺境の星』

アララギの歌人、雁部貞夫さんの『崑崙行』に続く第二歌集である。山の世界では、中央アジアやヒマラヤの研究家として知られる人。歌を作るのを知らない人が意外に多いと思うが、れっきとした歌人である。

三五九首の歌のほか、紀行・チトラール風まかせ、追悼・ブルハーン殿下の急逝の三部構成からなるユニークな短歌集で、表紙の絵（岩切岑泰）と見返しの木版（雁部輝子）が光る落ち着いた装幀もいい。

前作同様、歌はもとよりだが、紀行により惹かれるものがある。紀行は簡潔、端正で無駄がなく、それでいて行間から山の空気がそこはかとなく伝わってくる。中国、パキスタンを多少歩いてきた評者としては、これが実に爽快で心地好く感じられる。短歌で研ぎ澄まされた筆が、そのまま紀行にいかされている、といっていいだろう。

時に法顕、玄奘、ヘディンら先人をしのび、時に分厚いチャパティやとがったインディカ種の米を食べ、マンゴーやウリにかぶりつく旅だが、チトラール地方へは何度足を運んだことだろう。かつて雑誌『暮らしの手帖』でこの地方を紹介する氏の一文を読んだのは、もう二十数年前のはずで、移り気な私など気が遠くなるような山旅の仕方である。

第一歌集紹介の時は「奥さんの輝子さんの版画がいいから、つぎは仲のよいご夫婦の版画歌集を期待する」と書いたが、これはぜひ第三歌集で実現してほしいものである。

（**伊佐九三四郎**）

一九九六年十一月　短歌新聞社刊　三一七ページ　二千五百円

THE HIMALAYAN JOURNAL volume 52. 1996

ヒマラヤにはまだまだ新発見の余地がたくさん残されている。今までにない角度から撮られた写真が多数収められていて楽しめる。

この最新の『ヒマラヤン・ジャーナル』は主として一九九四年と一九九五年の遠征を語る十九本の寄稿と、要約された登行記録二十七編からなり、ヒマラヤを舞台とした山岳ドラマが国際性豊かに演じられていることを反映する。

日大山岳部の現役とOBによる一九九四年五月のエベレスト北東稜の登攀が池田錦重氏と登頂隊員の報告として巻頭におかれているのが目を引く。本号にはさらにもう一編の日本人による遠征の記録が載せられている。千葉工大隊が北面の新ルートから、一九九五年七月、ナンガ・パルバット登頂に成功。これを坂井広志氏が報告している。

（**宮下啓三**）

Published for THE HIMALAYAN CLUB,OXFORD UNIVERSITY PRESS.

A4変型　三三八ページ

書籍受入報告 (1995年11月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
平尾和雄	ネパール・旅の雑学ノート：暮らし・トレッキング・他	254pp/20cm	ダイヤモンド社	1996	出版社寄贈
永瀬嘉平	関東周辺の巨樹を歩く	157pp/19cm	書苑新社	1996	出版社寄贈
本の出版社(編)	登山・ハイキング・バス時刻表(近畿版・97冬春号)	406pp/19cm	書苑新社	1996	出版社寄贈
白山書房編集部(編)	日本の渓谷 '96	212pp/21cm	白山書房	1996	出版社寄贈
小西浩文・他(編)	カンチェンジュンガ無酸素登山報告書：ガイア・アルパインクラブ1995	56pp/30cm	ガイア・アルパインクラブ	1996	発行者寄贈
新井信太郎	雲取山のてっぺんから：信ちゃんの山荘日誌	163pp/20cm	けやき出版	1994	著者寄贈
新井信太郎	雲取山よもやま話	181pp/21cm	さきたま出版会	1996	著者寄贈
新井信太郎	雲取山に生きる：ランプとともに30年余りの山暮らし	262pp/20cm	実業之日本社	1988	著者寄贈
ウィング(編)	山稜 '96：1996年全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	135pp/22cm	全日本山岳写真協会	1996	発行者寄贈
長岡忠一	スキーの原点を探る：レルヒに始まるスキー歴史紀行	237pp/19cm	スキージャーナル	1996	著者寄贈
平野恵理子	散歩の気分で山歩き	159pp/22cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
雁部貞夫	辺境の星：雁部貞夫歌集	317pp/20cm	短歌新聞社	1996	著者寄贈
中澤眞二	私の技術の一生：発明の切掛を掴む	94pp/22cm	中澤眞二(私家版)	1996	著者寄贈
ブルーガイド出版部(編)	ネパール・ヒマラヤ・トレッキング(ブルーガイド・ワールドNo.24)	279pp/18cm	実業之日本社	1996	出版社寄贈
オコネル(著)手塚勲(訳)	ビヨンド・リスク：世界のクライマー17人が語る冒険の思想	494pp/22cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
大友幸一・八嶋寛(編)	仙台が誇る「山の先達・二人展」報告書 (槇有恒・山内東一郎〔展〕1996年9月 於：仙台市博物館)	54pp/26cm	「山の先達・二人展」実行委員会	1996	発行者寄贈
金子民雄	天山北路の旅	262pp/20cm	連合出版	1996	著者寄贈
吉住友一・他	三重県の山(分県登山ガイド No.23)	111pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
長野至・他	島根県の山(分県登山ガイド No.31)	111pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
岡山県山岳連盟	岡山県の山(分県登山ガイド No.32)	127pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
志村俊司(編)	イワナⅢ ：続・源流の職漁者	234pp/20cm	白日社	1990	出版社寄贈
志村俊司(編)	山と猟師とケモノたち	246pp/20cm	白日社	1995	出版社寄贈
志村俊司(編)	黒部の山人：北アルプスの猛者猟師山賊鬼サとケモノたち	238pp/22cm	白日社	1995	出版社寄贈
笠木實	岩魚の谷・山女魚の渓(画文集)	182pp/20cm	白日社	1994	出版社寄贈
山森欣一(編)	中国登山の手引き(第4版)	306pp/26cm	日本ヒマラヤ協会	1996	購入
中日新聞社社史編纂部(編)	中日新聞社の110年	230pp/27cm	中日新聞社	1996	発行者寄贈
日本野鳥の会愛知県支部(編)	海上の森の野鳥たち：109種	109pp/19cm	マック出版	1996	出版社寄贈
日中合同登山隊(編)	女神の山・チョモラリ：日中合同登山隊1996登山報告書	81pp/30cm	長野県山岳協会	1996	編者寄贈
植松晃岳(編)	信州のタカの渡り(1995年報)	133pp/26cm	信州ワシタカ類渡り調査研究グループ	1996	発行者寄贈
Roberto Mantovani	K2 : Challenging the Sky	144pp/36cm	White Star	1995	購入
Sydney Wignall	Spy on the Roof of the World	267pp/25cm	Canongate Books	1996	購入
Mirella Tenderini	Gary Hemming:The Beatnik of the Alps	190pp/22cm	Ernest Press	1995	購入

会務報告

【理事会】

日時　平成八年十二月十二日㈭　十八時三十五分～十九時五十分

場所　日本山岳会会議室

［出席者］宮下、中村各副会長、大屋、吉永、中川、大谷、伊藤、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、大倉、村井、神崎各常任評議員

［委任］村木会長、斎藤副会長、松浦、山本、田邊各理事、小倉、大森、重廣各常任評議員

◎議事に先立ち、現在入院療養中の村木会長の病状（盲腸炎）が報告された。

【審議事項】

㈠　推薦状交付願の件　　大屋

明治大学炉辺会より平成九年八～九月に、マナスル峰に登山隊を派遣するに当たり、ネパール王国政府に対し登山申請に必要な推薦状の交付要請がなされた。　　承認

㈡　文章転載許可願の件　　大屋

㈱博品社より平成九年一月より刊行予定の『日本の名山』全二十巻の企画構成に当たり、第二回配本「槍ヶ岳」に本会の高頭式会員の文章「鎗嶽」（日本山嶽志・博文社刊）一編の転載許可願がなされた。　　承認

㈢　八年度事業報告と平成九年度予算概算要求の件　　吉永

各委員会における平成八年度事業実績報告と、平成九年度予算概算要求を検討の上二月三日㈪までに提出願いたい。　　承認

㈣　平成八年度晩餐会・支部長会議の件（十二月七日㈯）　大屋・中川

①支部長会議　新高輪ホテル紅玉の間　十時三十分開催。二十三支部・支部長、支部長代理（四支部）出席。全国支部懇談会報告＝東海支部、平成九年度支部懇談会の主管は越後支部、九月二十七～二十八日に開催の予定。

②マナスル初登頂四十周年記念行事　十三時　高輪プリンスホテル・プリンスルームで開催、五百名の参加があり、盛会裡に終了した。

③年次晩餐会　十六時　受付開始　参加者六百八十七名（招待者二十名）

④海外登山報告会　K2登山隊　十六時三十分　慶雲の間。

⑤委員会・同好会作品展示　十六時　慶雲の間。

＊問題点として、受付における会費現金の受け渡しについて、時節がら考慮すべきではないかとの論が出された。総務からの提案として、来年度からは各理事においてもご一考をお願いしたい。

＊毎年参加を申し込みながら無断欠席者があり、今回も二十名が無断で欠席した。その対応を考慮していきたい。

【報告事項】

㈠　会費未納の件　　吉永

現在八百五名の年会費未納者に対し、十一月十日会費納入請求振込書を発送した。

【委員会報告】

●指導委員会・熊崎

冬の研修会を開催。詳細は「山」一月号に掲載発表の予定。

①アイスクライミング研修会　二月一日㈯～三日㈪　八ヶ岳赤岳西面氷曝群　主任講師・山本一夫

②冬山登山研修会　二月二十二日㈯～二十三日㈰　中央アルプス木曾駒ヶ岳　主任講師・高塚武由

③初中級者対象山岳スキー研修会　三月二十一日㈮～二十三日㈰　中央アルプス木曾御岳　主任講師・高塚武由

④中上級者対象山岳スキー研修会　四月十二日㈯～十四日㈪　谷川岳周辺　主任講師・渡邊雄二

＊参加者は遭難救助費用を含む障害共済保険加入者であることを条件とする。

●集会委員会・中川

①年次晩餐会後の懇親山行　十二月八日㈰　奥多摩長尾平　約百名参加

②八方尾根スキー懇親会　一月十日㈮～十二日㈰　国民宿舎泊

ヨーロッパアルプスでの新鮮な歓び、それは地元に詳しいプロの山岳ガイドとの山行だ！　有名な歴史ある山々に登り、渓谷を滑り、ヨーロッパの登山文化の全てをお見せしよう。貴方の能力と要求に応じた山スキーもアレンジできる。ご連絡を待つ。こちらスキーインストラクターも兼務。料金は一日当り sFr.350. より。言葉は英・仏・独。

ベアート・フートマッハー（Beat Hutmacher）Chalet Enzian, CH-3707 Därlingen / Interlaken.
Tel & Fax：001-41-33 823 20 71

■会員異動

物故

奥田五郎（一七〇二）

小泉喜重（二七六四）

計良幸一（八〇〇八）　8・6・12

退会

松田文人（三九三一）　8・12・28

改姓

松本和貴→湯口和貴

福山友規子→足立友規子

終身会員

岩崎三郎（六二六二）

INFORMATION

◆講演会のお知らせ

科学委員会

昨年三月に「中央アンデス文明形成の先史学的研究」で第三十二回秩父宮記念学術賞を受賞された大貫会員を講師にお招きし、アンデスの古代文明についてのお話をうかがおうと思います。

日時　三月十七日(月)　十八時三十分
場所　山岳会ルーム
テーマ　『アンデスの遺跡を掘る』
講師　大貫良夫会員（東京大学教養学部教授）

◆探索山行（予告）

科学委員会

六月十四日(土)、十五日(日)両日「磐梯火山の活動（仮題）」をテーマに、福島県猪苗代町磐梯山周辺の探索山行を行います。右記の講演のほか、猫魔岳から雄国沼、磐梯山登山の予定です。詳細については次号に掲載します。

◆お花見ハイクのご案内

ジャック93会

麗らかな春の陽を浴びて伊豆の山をハイキング、お花見を楽しみませんか。

日時　四月六日(日)
場所　天城山(万二郎岳、万三郎岳)
集合　JR伊東駅前八時四十五分（熱海発八時二十五分接続）
伊東発八時五十五分天城高原ゴルフ場行きバスに乗車
申込　ハガキに会員番号、氏名、住所、電話番号、宿泊明記の上三月二十八日までに本田榮三郎宛（横浜市港南区日野南五―二七―三　TEL・〇四五―八四五―三〇四一）

＊希望者は前日の四月五日(土)に伊東の民宿に宿泊（約七千五百円）することもできます。

◆安曇野山岳美術館移動展

山岳美術館長

近代山岳絵画の先駆者で、日本山岳会の略章をデザインした故足立源一郎（会員番号一五二四）の山岳絵画（油彩画、デッサン）の展示です。

日時　三月四日(火)～十六日(日)
場所　電通恒産画廊（東京都中央区銀座六―五―一　みゆき共同ビル地階）
TEL・〇三―三五七四―二七七七

＊無料公開

◆「山岳」一九九六の記事訂正

九四ページ「ムスターグ・アタ山群未踏峰の登頂」はじめにの項七行目「松永敏郎氏の紹介二名、山形出身者一名、防大OB一名による……」を傍点部分に訂正します。（川上　隆）

ルーム日誌

12月

5日　山の自然学研究会
9日　図書委員会　アルパインスキークラブ
10日　自然保護委員会　二火会　アルパインスケッチクラブ　データバンク委員会
11日　常務理事会　ジャック93会
12日　理事会　集会委員会
13日　青年部　フォトビデオクラブ
16日　総務委員会　資料委員会
17日　フィルムビデオ委員会　96同期会
18日　資料委員会　三水会
19日　データバンク委員会　94同期会
20日　緑爽会
21日　土曜会
24日　自然保護委員会
25日　科学委員会
26日　集会委員会

12月来室者546名

❖編集後記❖

会報の巻頭記事には、主に会の主要行事を取り上げていますが、最近は〝教養番組〟的なものも掲載しています。昨年一年間では、「最近の山岳通信の進歩」（科学委員会・二月号）「中央アルプスと山岳雪崩」（新田隆三・四月号）、「登山を中心に運動と活性酸素」（大野秀樹・五月号）、「山から失われる生き物たちのにぎわい―生物多様性の視点から」（堂本暁子・八月号）、「環境と森林」（岩坪五郎・十一月号）となっています。

今月号は、新田隆三会員に「樹形にみる森林の生き残り戦略」について執筆していただきましたが、非常にユニークな興味深い内容です。

これからも、このような〝教養番組〟的なものを取り上げていきたいと思いますが、会員の皆様のご意見をお聞かせください。（伊藤　敞）

日本山岳会会報　山　621号
1997年（平成9年）2月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5－4
サンビュウハイツ四番町
TEL　東京（03）3261－4433
FAX　東京（03）3261－4441
発行者　村木潤次郎
編集人　伊藤　敞
印　刷　株式会社　双陽社